

## 謡曲「江口」に於ける

## 世阿弥自筆本・光悦本・現行観世流本の対照

前田正民

能楽の完成者観阿弥・世阿弥の頃の能が、どの程度の演出であったかは分からないが、一日の上演曲数が随分多かつたことは、世阿弥の「花鏡」中、「序破急之事」の条に、「凡そ昔は、能数四五番には過ぎず。さる程に、五番目は必ず急なりしかども、当時は、けしからず能数多ければ」云々とあるによって明らかである。

群書類従所収の糺河原勸進猿楽日記から番組だけ摘記する。

初日

相生(三ノ丸長者) 八島(サルヒキ) 三井寺(カクレミノ) 邯鄲(ハチタ、キ) 源氏供養(懐中) 丹後物狂(八幡之前) 鶺鴒

二日

鶺鴒(ヒケカイトチ) 敦盛(蚊) 山祖母(大か小か) 春近(鬼ノマメ) 松風村雨(イモシ) 自然居士(キシヤク) 恋重荷

三日

白楽天(三本柱) 誓願寺(コヨミ) 箱王曾我(アサイナ) 実盛(茶ガキザトウ) 二人静(ハラツマミ) 四位少将(若メ) 碓(入間川) 放下僧(見るむこ) 杜若(カラカサノシユウク) しきみが原(ワラウチ) 養老(餅クイ) 名取老女

右によると初日二日は能七番、括弧内は狂言で何れも六番、三日目は能十二番（養老と名取老女は御乞能となっている）。狂言十一番である。右の勧進能は寛正五年（一四六四年足利八代義政の時）四月で初日は四日、二日目は七日、三日目は十日である。なお右記番組中二日目の春近は異本糺河原勧進申樂記（群書類従所収）には右近とあり、三日目の礎は撰津、しきみが原は鞍馬天狗となっている。世阿弥は一四四三年死去したといわれるから右の勧進能は世阿弥歿してから二十一年後のことで、その後の記録で一日十番以上の演能のあったことが随分見られる。今日これ等の曲を完全に演ずるとしたら到底一日には演じきれない。テンポの点では一寸想像も及ばない。

ところがその詞章に於いては今日と大差のないことが見られる。今、川瀬一馬博士によってわんや書店から発行された世阿弥真蹟複製本に載っている能本七番中の「江口」の全文を、光悦本と現行観世流本と並列して掲げて見ることとする。光悦本は、日本古典全集刊行会で発行された光悦本、現行観世流本は、昭和四十年六月松書店発行の本によった。漢字・仮名・送仮名・衍字・誤記のものもすべて原拠の書の通りにした。特に自筆本には表音式な記し方があり、句読点やわざわざ濁点を加えた処など統一を欠いているところもあるが、すべてそのままにしておいた。漢字や変体仮名等はやむをえず現行の漢字や仮名に改めた。自筆本の方は謠い方の記号なども精々記載することにしたが、光悦本や現行本の方は殆んど省略した。印刷が煩わしくなるのと、現行本は手近に見得るからである。自筆本では、ハル・クルなどの字体が不明瞭な処があり、その他にも不明な箇処が可なりあり、遺憾ながら省いた処も数箇処ある。句読点に当たる処で原本にやや離して書かれていると思われる処は一字あけて記しておいた。

光悦本では、行末句読になる場合は、句読点を次の行頭につけているので、ここでもそれに従った。現に宝生流の謠本もその形式になっている。

世阿弥自筆本

光悦本

現行観世本

(三)

次第 ソウニハカリ

月ワムカシノトモナレハく世ノホカイツ

クナルラン

ナシ事

コレワホクロクダウヨリイテタル シヤモ

ンニテ候。ワレコノホトミヤコニ候ツルカ

ナヲくシヨコク一ケンノ ノソミ候マ

ツくキナイノレイフツレイシヤ サン

ケイノ心サシ候テ ドウバンノソウ二三入

トモナイテコン日 ハヤタヒタチ候<sup>ニイ</sup>ミヤ

コヲハマタヨフカキニ旅立テヨトノカワフ

ネユクスエワ<sup>ヘルツ、ク入</sup> ウドノ、アシノ<sup>下ヘル</sup> ホノミエ

シ。マツノケフリノナミヨスル<sup>フル</sup> エクチノ

サトニツキニケリ<sup>ヘル</sup>く

コレワエクチノサト、申候アレナル木陰ニ

イシヲタ、メルキシカケニシヤクタウノ

ミエ候ユエアリケナル 人ノアト、ミエテ

候サト人ニタツネハヤト 存候

次第

月は昔のともならば。く

よの外いつくならまし

是は諸国一見の僧にて候。

我いまた摂津国天王寺にまい

らす候程に。此度天王寺に参

らはやと思ひ候

上歌

みやこをはまた夜深きにた

ひたちて。く。淀の川船行

末はうとのゝ蘆のほの見えし

。松のけふりの波よする。江

口の里につきにけりく

ワキ 次第

月は昔の友ならば。月は昔

の友ならば。世の外いつくな

らまし。これは諸国一見の

僧にて候。我いまだ津の国天

王寺に参らず候程に。この度

思ひ立ち天王寺に参らばやと

思ひ候

ワキ 上

都をば。まだ夜深きに旅立

ちて。まだ夜深きに旅立ちて

淀の川舟行く末は。鵜殿の蘆

のほの見えし。松の煙の波寄

する。江口の里に。着きにけ

り江口の里に着きにけり。

(欄外に○ワキ碧セリフ及ヒ  
がある。)ワキ狂言問答アリと注記

ヲカシニトウヘシ

コノシヤクタウワイニシエノエクチノキ  
 ミトテ ナニキコエタルユウクンノアト  
 ノシルシニテ候 コレワカジンニテイラ  
 レ候ケルカ マコトワフケンホサツノケ  
 シンナト、申ツタエテ候 サイヤウ上  
 人モ ウタヲ ヨマレテ候ケルニ ヲモ  
 シロキヘンカヲセラレタリケルナント申  
 ツタエテ候 心アル人ワ御トフライ候  
 タチヨリテ御トフライアラウスルニテ候  
 ホウシコトハ  
 サテワイニシエノ エクチノキミノアトナ  
 リケリ ソノミワドチウニウツモルレトモ  
 ナワト、マリテ イマ、テモ。ムカシカ  
 タリノキウセキヲ トフ라우事ノアリカタ  
 サヨ コトハ ケニヤサイキヤウホウシ一ヨノヤト  
 ヲカリケルニ サシコト アルシノ心ナカリケレハ  
 下  
 ヨノナカラ イトウマテコソカタカラメ  
 カリノヤトリヲ ヲシムキミカナト エイ

ワキ詞

へさてはこれなるは江くちの  
 君の旧跡かや、痛<sup>カ、ル</sup>しや其身は  
 土中にうつむといへとも。名  
 はとまりていま迄も。昔語  
 の旧跡を今みる事の哀さよ。  
 詞  
 実や西行法師此所にて。一夜  
 の宿をかりけるに。あるしの  
 心なかりしかは。世中<sup>下</sup>をいと

ワキ上

へさてはこれなるは江口の君  
 の旧跡かや。傷はしやその身  
 は土中に埋むといへども。名  
 は留まりて今までも。昔語の  
 旧跡を。今見る事の哀れさよ。  
 げにや西行法師この所にて。  
 一夜の宿を借りけるに。主の  
 心なかりしかば。世の中を厭

シケンモ ツ、ク コノ人ノヤトリナリケリ 入 アラ  
 ヲモシロノエイカヤナ  
女コトハ  
 ハイカニタヒ人 イマノウタヲハナニトエ  
 イシタマイサフラウソ  
ホウシ  
 ヘフシキヤナジンカモミエヌ。カタハラヨ  
 リ ニヨシヤウ一人アラワレテ イマノエ  
 イカノ クチスサミヲ イカニト トワセ  
 タマウ事ソモナニノタメ タツネタマウソ  
 ハワスレテトシヲヘシモノヲ カ、ル マタヲモイ  
女  
 ソムコトノハノ カ、ル クサノカケノ、ツユノヨ  
下  
 ヲ イトウマテコソカタカラメ。カリノヤ  
 トリヲ、シムトノ。ソノコトノハモ ハツ  
下  
 カシケレハ。サノミワ ハル ヲシミ フル マイラセ  
 サリシ 下 ソノコトワリヲモマウサンタメニ  
 コレマテアラワレイテタルナリ  
 ヘ心エスカリノヤトリヲ、シムキミカナト  
 サイキヤウホウシノヨミケルアトヲ タ  
 、ナニトナクトフラウトコロニ サノミワ

ふ迄こそかたからめ。仮の宿  
 りをおしむ君かなと詠しけむ  
 も此所にての事なるへし。あ  
 らいたはしや候 シテ へなふ  
 へあれなる御僧。今の歌を  
 は何と思ひよりてくちすさひ  
 たまひ候 ワキ へふしきやな人  
 家も見えぬかたよりも。女性  
 一人来りつゝ。今の詠歌のく  
 ちすさひを。いかにとはせ  
 給ふ事。そも何故にとひ給ふ  
シテ  
 ぞ。へ忘れて年をへし物を。  
 又おもひそむことのはの。草  
 のかけ野の露のよを。いとふ  
 まてこそかたからめ。かりの  
 宿りをおしむとの。其言のは  
 も恥かしければ。さのみはお  
 しみ参らせさりし。其ことは

ふまでこそ難からめ。仮の宿  
 りを惜しむ君かなと詠しけん  
 も。この所にての事なるべし。  
 あら傷はしや候 呼掛 へなう  
 へあれなる御僧。今の歌を  
 は何と思ひ寄りて口ずさみ給  
 ひ候 ワキ ぞ。へ不思議やな人家も  
 見えぬ方よりも。女性一人来  
 りつゝ。今の詠歌の口ずさみ  
 を。如何にと問はせ給ふ事。  
 そも何故に尋ね給ふぞ シテ へ忘  
 れて年を経しものを。また思  
 ひ染む言の葉のカ、ル草の陰野  
 の露の世を。厭ふまでこそ難  
 からめ。仮の宿りを惜しむと  
 の。その言の葉も恥かしけれ  
 ば。さのみは惜しみ参らせざ  
 りし。その理をも申さん為に。

ヲシマサリニシト　コトワリタマウ　御ミ  
ワサテ　イカナル人ニテマシマスソ  
女  
ヘイヤサレハコソ。カリノヤトリヲ、シム

トノ御心ノウチモ　ハツカシケレハヲシマ  
又ヨシノ御カエシヲ　申シウタヲハ　ナニ  
トテカ　エイジモセサセ　タマワサルラン  
ホウシ  
ヘケニソノヘンカノコトノハワ。ヨヲイト

ウ  
女下  
ヘヒト、シキケハカリノヤトニ　心トムナ

下ハル

トヲモウハカリソ。コ、ロトムナト　ステ

人ヲ　イザメ申ハ　女ノヤトリニトメマイ

ラセヌモコトワリナラスヤ　ヘケニコトワ

リナリ　サイキヤウモ　カリノヤトリヲス

テ人トイ、　女  
ヘコナタモナニヲウイロコノ

ミノ　イエニワ　サシモムモレキノ　ヒト

シレヌコトノミヲ、キヤトニ

ホウシ  
ヘ心トムナトエイシタマウワ　ヘステ人ヲ

ヲモウ心ナルヲ

りをも申さんために。是迄顯  
れ出たるなり　ワキ  
ヘ心えず飯の

宿りを惜む君哉と。西行法師

か詠せし跡を。唯何となく弔

ふ処に。さのみはおしまさり

にしと。理り給ふ御身は扱。

カ、ル  
いかなる人にてましますそ

シテ  
ヘいやされはこそ惜まぬよし

の御返事を。申し歌をは何と

てか。詠しもせさせたまはさ

るらん　ワキカ、ル  
ヘけにその返歌の言

のは、世をいとふ　シテ  
ヘ人とし

きはかりの宿に。心とむな

と思ふはかりそ。心とむなと

捨人を。いさめ申せは女のや

とりに。とめ參らせぬも理な

ワキカ、ル  
らすや　ヘ実ことほりなり西

行も。飯の宿りを捨人といひ

これまで現れ出でたるなり

ワキ  
ヘ心得ず飯の宿りを惜しむ君

かなと。西行法師が詠せし跡

を。ただ何となく弔ふ処に。

さのみは惜しまざりにしと。

ことわり給ふ御身はさて。

上  
カ、ル  
如何なる人にてましますぞ

シテ  
ヘいやさればこそ惜しまぬ由

の御返事を。申し歌をは何

とてか。詠しもせさせ給はざ

るらん　ワキ上  
ヘげにその返歌の

言の葉は世を厭ふ　シテ  
ヘ人とし

聞けば飯の宿に。心とむなと

思ふばかりぞ。心とむなと捨

人を。諫め申せば女の宿りに

泊め參らせぬも理ならずや

ワキ上  
カ、ル  
ヘげに理なり西行も飯の宿

りを捨人と言ひ　シテ  
ヘ此方も名に

ホウシ  
 女  
 へタ、ヲシムトノ 女  
 へコトノハワ。ヲシム ニイ同  
 コソ ヲシマヌカリノヤトナルヲノナト  
 ヤヲシムトユウナミノ。カエラヌイニシエ ナカム  
 ワ イマトテモ。ステヒトノ。ヨカタリニ クル  
 スクニ クル  
 ハル  
 心ナ ト、メ給ソ。ケニヤウキヨノ。モ ホウシロンキ  
 ノカタリノ。キケハスカタモ タソカレ  
 ニ カケロウ人ワイカナラン 下  
 へタソカレニ タ、スムカケワ 入 ホノノ  
 トノノ ミエカクレナルカワグマニエクチ フル  
 ノナカレノ フル キミトヤミエンハツカシヤ 下  
 へサテワウタカイアライソノ ナミトキエ ホウシ  
 ニシ アトナレヤ フル へカリニスミコシワカ 女  
 ヤトノ ホウシ へムメノタチエヤミエツラン クル  
 へヲモイノホカニ。キミカキマセルヤ。イ フル  
 ナカム ツ、ク下  
 チジユノカケニヤ、トリケン マタワ一カ スズル  
 ノナカレノミツ 下 ヲスル ツ、ク クミテモシロシメサレヨ ソラス  
 ハル クル ス 下 エクチノキミノユウレイソト 下 コエハ 下

シテ  
 へこなたは名におふ色このみ  
 の。家にはさしも埋木の。人  
 しれぬことのみおほき宿に  
 へ心とむなと詠し給ふは ワキ  
 へ捨人を思ふ心なるを シテ へた  
 へおしむとの シテ へ言の葉は  
 へおしむこそ惜まぬかりのや 上  
 となるを。ノ。などやおし  
 むといふなみの。かへらぬい ワケ  
 にしへは今とても。すて人の  
 よかたりに心なとよめ給ひそ 上  
 実やうき世の物語。きけは姿 上  
 もたそかれにかけらふ人はい 上  
 かならむ へたそかれにた 上  
 すむかけはほのノと。見え 上  
 かくれなる河くまに。江口の 上  
 なかれの君とや見えん恥かし

負ふ色好みの。家にはさしも  
 埋木の。人知れぬ事のみ多き ワキ上  
 宿にカ、ル へ心とむなと詠し給 シテ  
 ふは へ捨人を思ふ心なるを ワキ  
 へただ惜しむとの シテ へ言の葉 上  
 は 上 へ惜しむこそ。惜しまぬ 上  
 飯の宿なるを。惜しまぬ飯の 上  
 宿なるを。などや惜しむと夕 上  
 波の。返らぬ古は今とても。 上  
 捨人の世語に。心な留め給ひ 上  
 そロンキ へげにや浮世の物語。 上  
 聞けば姿も黄昏に。かげろふ 上  
 人は如何ならん へ黄昏に。 上  
 たゝずむ影はほのノと。見 上  
 え隠れる川隈に。江口の流 上  
 れの君とや見えん恥かしや 上  
 へさては疑ひ荒磯の。波と消 上

カ入  
リシテウセニケリ〜  
ッル ヨスル

ヲカシ

〜サレハコソコレワコノホトモタウトイ  
人ノユメニモ ムカシノエクチノチャウ  
カワフネニテ ツ、ミ シヤウカニテ  
アソヒタマウカ ノチニワ フケンホサ  
ットナテ テンニアカリタマウト ユメ  
ニモミ マタワ マホロシニモ 月ヨナ  
ントニワ ミエタマウト ヲセラレ候ソ  
コノカワハタニテ 心ヲスマイテ ゴ  
ランセラレ候へ マコトニタツトキ御コ  
トテワタリ候ワハ ムカシノエクチノチ  
ヤウ フナアソヒニテ御ミエ候ヘキソマ  
チテコラン候へ マコトワムカシノエク  
チノチャウワフケンホサツノ ケン〜  
トコソ申ツタエテ候へ

ホウシコトハ  
〜ケニヤクワイコク アンキヤノミトテ  
クニ〜トコロ〜ニイタルユエ カ、ル

や<sup>土地</sup> 扱はうたかひあら磯の  
。波と消にし跡なれや<sup>シテ</sup> 仮  
にすみこしわか宿の<sup>地</sup> 梅の  
立枝や見えつらん<sup>シテ</sup> 思ひの  
外に<sup>下同</sup> 君かきませるや。一  
樹のかけにやとりけむ。また  
は一河の流の水。くみてもし  
ろしめされよや。江口の君の  
幽霊そと声はかりしてうせに  
けり〜

ワキ  
〜さては江口の君の幽霊かり

えにし跡なれや<sup>シテ</sup> 仮に住み  
来し我が宿の<sup>地</sup> 梅の立枝や  
見えつらん<sup>シテ</sup> 思ひの外に<sup>地中</sup>  
君が来ませるや。一樹の蔭  
にや宿りけん。または一河の  
流れの水。汲みても知るし召  
されよや。江口の君の幽霊ぞ  
と声ばかりして。失せにけり  
声ばかりして失せにけり<sup>中入</sup>  
(欄外に○狂言問語アリと注記が  
ある。)

ワキ  
〜さては江口の君の幽霊仮



キトクヲミキク事 サナカラシユツケノク  
トクナリ コンヤワ月ノヨモスカラ エク  
チノキミノキウセキニテ 御キヤウヲヨミ  
トフラワント イ、モアエネハ フシキヤ  
ナ<sup>クル</sup> 月スミワタルカワミツニ ユウチ  
ヨノウタウフナアソヒ 月ニミエタルフシ  
キサヨ<sup>クル</sup> 下

カサリフネニテユウ女二三入

ハシカ、リニテシツ<sup>フル</sup>トウタウヘシ

ヘカワフネヲトメテアウセノナミマクラ

ウキヨノユメヲ ミナラワシノヲトロカ

又ミノハカナサヨ サヨヒメカマツラカタ

カタシクソテノナミタノ モロコシフネ

ノナコリナリ。マタウチノハシヒメノ ト

ワントモセヌ人ヲマツモ ミノウエトアワ

レナリ。ヨシヤヨシノ、ハナモユキモ

クモ、ナミモ アワレ。ヨニアアハヤ

下カ、ル

に顕れ。我にこと葉をかはし  
けるそや。いさ弔ひてうかへ  
んと<sup>上歌</sup> へいひもあへねはふし  
きやな。 月すみわたる  
川水に。遊女のうたふ舟あそ  
ひ。月に見えたるふしきさよ  
川船をとめて逢瀬の波  
枕。 うきよのゆめを見  
ならはしのおとろかぬ身のは  
かなさよ。 さよ姫か松浦かた  
。 かつしく袖の涙の唐船の名  
残なり。 又うちの橋姫も。 と  
はむ共せぬ人を待も身の上と  
哀なり。 よしや吉野の。 よし  
や吉野の花もゆきも雲もなみ  
もあはれよにあは<sup>ワキカ、ル</sup>や へふ  
しきやな月澄渡る水の面に遊  
女のあまたうたふうたひ。 色

に現れ。我に言葉を交はしけ  
るぞやカ、ル<sup>上</sup>いざ弔ひて浮かめ  
んと<sup>ワキ、上</sup> へ言ひもあへねば  
不思議やな。 言ひもあへねば  
不思議やな。 月澄み渡る川水  
に。 遊女の謡ふ舟遊。 月に見  
えたる不思議さよ月に見えた  
る不思議さよ

後テ、ツレ<sup>上</sup> へ川舟を。 泊めて逢

ふ瀬の波枕。 泊めて逢ふ瀬の  
波枕。 浮世の夢を見ならはし  
の。 驚かぬ身の儂さよ。 佐用  
姫が松浦瀉。 片敷く袖の涙の  
唐土船の名残なり。 また宇治  
の橋姫も。 訪はんともせぬ人  
を待つも身の上と哀れなり。  
よしや吉野の。 よしや吉野の  
花も雪も雲も波もあはれ。 世

ホウシタツヘシ

ホウシコトハ

〱ヨモステニ フケユク月ノミツノヲモニ

ウカメルフネノウチヲミレハユウチヨノ

アマタ ウタウ ウタイ イロメキミエタ

ル 人カケハ イカナル人ノフネヤラン

女トハ

〱ナニコノフネヲ。タカフネトワ ハツカ

シナカライニシエノ エクチノユウチヨノ

カワゼウヨウノ 月ノヨフネヲゴランセヨ

ホウシ

〱ソモヤエクチノユウチヨトワ ソレワサ

リニシイニシエノ

女

〱イヤイニシエトワ コランセヨ 月ワム

同女

カシニカワラメヤ 〱ワレラモカヤウニ

ミエキタルヲ イニシエ人トワ ウツ、ナ

ヤ 〱ヨシト〱ナニカトトイタマウトモ

同女

〱エイワシヤキカシ 〱ムツカシヤ

上サウカフシナカムモツ ハヤケクルクル ッ、クフルナカム

アキノミツ ミナキリヲチテ

クル下ユル

サルフネノ

月モカケササヲノウタ。ウタエヤウタ

入クルクル

ニイ下同

めきあへる人影は。そも誰人

の船やらん 〱なレテに此舟をた

か舟とは。恥かしなから古の

。江口の君の河せうようの月

の夜船を御覽せよ 〱そワキカ、ルもや

江口の遊女とは。それは去に

しいにしへの 〱シテいや古とは

御覽せよ。月は昔にかはらめ

や 〱我ツレ女らもかやうに見えき

たるを。いにしへ人とはうつ

ゝなや 〱シテよし〱何かとの

たまふ共 〱ツレいはしやきかし

〱むつかしや。あニ入きの水。み

なシテきりおちて。さる船の

〱月も影さす。さほの歌

〱うたへやうたへうたかたの

下歌

に逢はばやカ、ワキ上へ不思議やな

月澄み渡る水の面に。遊女の

あまた語ふ謡。色めきあへる

人影は。そも誰人の舟やらん

後シテ

〱なレテにこの舟を誰が舟とは。

恥かしながら古の。江口の君

の川道逢の月の夜舟を御覽せ

よ 〱そワキもや江口の遊女とは。

それは去りにし古の 〱シテいや

古とは。御覽せよ月は昔に交

らめやカ、ツレ上へ我等もかやうに

見え来るを。古人とは現なや

〱シテよし〱何かと宣ふとも

カ、ツレ上へ言はじや聞かじ 〱むつか

しや 〱ツレ上せい 〱秋の水。漲り落ち

て。去るふねの 〱シテ月も影さ

エ <sup>スクニ</sup>ウタカタノ。アワレムカシノコイシサ  
 フル<sup>フル</sup>ヲイマモ。ユウチヨノ フナアソヒ。ヨヲ  
 ワタル <sup>ヨスル</sup>ヒトフシヲ ウタイテ <sup>フル</sup>イサヤア  
 ソハン

<sup>上序</sup>ソレ十二インエンノルテンワ クルマノニ  
 ワニ メクルカコトク トリノハヤシニア  
 ソフニ、タリ、ゼンジャウ マタセンジャ  
 ウ カツテシヤウノノサキヲシラス ラ  
 イセナヲライセ サラニ、セ、ノヲワリヲ  
 ワキマウルコトナシ。<sup>サシコエ</sup>アルイワ ニンチ  
 ウ テンジャウノ ゼンクワヲ ウクトイ  
 エトモテンタウメイマウシテ イマタゲダ  
 ツノ <sup>下</sup>タネヲウエス アルイワ 三ツハツ  
 ナンノアクシユニ <sup>下</sup>ダシテ クワンニサエ  
 ラレテステニホッシンノナカタチヲウシナ  
 ウ。<sup>下</sup>シカルニワレラタマノウケカタキニ  
 ンジンヲ ウケタリトイエトモ ザイコウ  
 フカキミトウマレコトニタメシスクナキ

、あはれ昔のこひしさを今も  
 遊女の船あそび。世を渡る  
 一ふしをうたひていさや遊は  
 ん <sup>上六回</sup>。夫十二因縁の流転は車  
 の庭にめくるかとし。鳥の  
 林にあそぶに似たり。前生又  
 前生 <sup>シテ</sup>。へかつて生々のさきを  
 しらす <sup>地</sup>。来世猶来世。更に  
 世々の終りをわきまふる事な  
 し <sup>ナシ</sup>。へ或は人中天上の善果を  
 うくといへとも。顛倒迷妄し  
 ていまた解脱のたねを植す  
 上  
 へ或は三途八難の悪趣に墮し  
 てへ患にさへられて既発心の  
 なかたちをうしなふ <sup>下</sup>。へしかる  
 にわれら適うけかたき人身を  
 受たりにいへ共へ罪業深き身  
 とむまれ。ことにためしすく

す。棹の歌 <sup>地中</sup>。へ謡へや謡へ  
 泡沫の。あはれ昔の恋しさを  
 今も。遊女の舟遊。世を渡る  
 一節を謡ひて。いさや遊ばん  
 クリ <sup>上</sup>。へそれ十二因縁の流転は車  
 の庭に廻るが如し。鳥の林に  
 遊ぶに似たり <sup>地</sup>。へ前生また前  
 生 <sup>シテ</sup>。へ曾て生々の前を知らず  
 地  
 へ来世なほ来世。更に世々の  
 終りを辨ふる事なし <sup>シテ上</sup>。へ或  
 は人中天上の善果を受くとい  
 へども <sup>地</sup>。へ顛倒迷妄して未だ  
 解脱の種を植えず <sup>シテ上</sup>。へ或は三  
 途八難の悪趣に墮して <sup>地</sup>。へ患  
 に碍へられて既に発心の媒を  
 失ふ <sup>シテ中</sup>。へ然るに我等たまノ  
 受け難き人身を受けたりとい  
 へども <sup>地</sup>。へ罪業深き身と生ま

カワタケノ ナカレノ女トナル。サキノヨ  
ノムクイマテ ヲモイヤルコソカナシケレ  
クセニイ  
コウクワノハルノアシタコウキンシウノ  
山 ヨソライヲナスト ミエシモ ユウヘ  
ノ風ニサソワレ クワウヨウノ秋ノユウヘ  
クワウくケツノハヤシ イロヲフクム  
トイエトモ アシタノシモニウツロウ。シ  
ウフウラケツニ コトハヲカワス ヒンカ  
クモ サテキタル事モナシ スイチヤウコ  
ウケイニ マクラヲナラヘシ イモセモ  
イツノマニカワヘタツラン ヲヨソ心ナキ  
サウモクナサケアルジンリン イツレアワ  
レヲ ノカルヘキ カクワ ヲモイシリナ  
カラ <sup>上</sup>アルトキハイロニソミ トンチャク  
ノ ヲモイアサカラス マタアルトキハ  
コエヲキ、 アイシウノ心 イトフカシ  
心ニヲモイ クチニユウ マウセツノエン  
トナルモノヲ ケニヤミナ人ワ 六チンノ

なき河竹のなかれの女となる  
。前の世の報ひ迄思ひやるこ  
そかなしけれ <sup>クセマイ</sup> 紅花の春のあ  
した。紅錦繡の山よそほひを  
なすと見えしも。夕の風にさ  
そはれ紅葉のあきのゆふへ。  
黄纈纈のはやし。色をふくむ  
といへとも朝の霜にうつろふ  
。松風蘿月にことはをかはず  
。寶客も。さつてきたる事なし  
。翠帳紅閨に。まくらをなら  
へし妹背もいつのまにかは隔  
つらん。をよそ心なき草木。  
情ある人偷いつれ哀をのかる  
へきかくは思ひしりながら  
<sup>上</sup>有時は色にそみ貪着のおもひ  
あさからず。又有時は声をき  
ゝ愛執の心いと深き心に思ひ

れ。殊に例少き川竹の流れの  
女となる。前の世の報いまで。  
思ひやるこそ悲しけれ  
<sup>クセ下</sup>  
へ紅花の春の朝。紅錦繡の山  
粧ひをなすと見えしも。夕べ  
の風に誘はれ黄葉の秋の夕べ。  
黄纈纈の林。色を含むといへ  
ども朝の霜にうつろふ。松風  
蘿月に言葉を交はず寶客も。  
去つて来る事なし。翠帳紅閨  
に。枕を並べし妹背も何時の  
間にかは隔つらん。およそ心  
なき草木。情ある人偷いづれ  
あはれを通るべき斯くは思ひ  
知りながらへ <sup>ソテ上</sup>或時は色に染み  
貪着の思ひ浅からずへ <sup>地</sup>また或  
時は。声を聞き愛執の心いと  
深き心に思ひ口に言ふ妄染の

キヤウニマヨイ 六コンノツミヲ ツクル  
 事モ ミル事キク事ニマヨウ心ナルヘシ。  
 ワカ上クル  
 ヲモシロヤ、マイアルヘシ

和歌上舞アルヘシ

女入

ハヨモシロヤクルツサウムロノ大カイニ。ゴ  
 クルハル チンロクヨクノ カセワ 下ユル フカネトモ。

同音ハル

ハスイエンシンニヨノナミノ タ、ヌヒモ

ナシクル

女下

ハナミノタチイモナニユエソ。カリナルヤ

エルラウ下

トニ。コ、ロトムルユエ

キリヒヤクシノル

ハ心トメスワ ウキヨ モアラシ 女下ヘヒト

ヲモシタワシ

クルフル 女下

ハマツクレモナク ハワカレチモアラシフ

ク。同音上クル 月入入 ヲモシチヨ 月入入 ヲモシチヨ 月入入 ヲモシチヨ

ナカムナカム アラヨシナヤ。ハヨモエハカリノヤト。

同クル ナカムナカム 女下ハヤフシ ヲククル ナカム

ハヨモエハカリノヤトニ。コ、ロトムナト

下ハル フルフル 下ハル フルフル 上、クル

人ヲタニ。イサメシワレナリ コレマテナ

リヤカエルトテ スナワチフケン。ホサツ

ツ、ハル ヲククル

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

ホサツ

口にふふ妄染の縁となるもの

を。実やみな人は六塵の境に

まよひ。六根の罪をつくる事

も。みることきく事にまよふ

心なるへし 上地シテワカ

相無漏の大海に。五塵六欲の

風は。ふかねとも 上地シテ

如のなみの。たゞぬ日もなし

シテ下シテ 浪の立居も何ゆへそ

かりなる宿に。心とむる故

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

シテ下シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

上地シテ下 心とめすはうきよもあらし

縁となるものを。げにや皆人

は六塵の境に迷ひ。六根の罪

を。作る事も。見る事聞く事

に迷ふ心なるべし 上シテ上

序之舞ワカ 上地シテ上 実相無漏の大海に。

五塵六欲の風は。吹かねども

上地シテ上 随縁真如の波の。立たぬ

日もなし立たぬ日もなし

シテ中シテ中 波の立居も何故ぞ。仮なる

宿に。ノル(中) 心とむるゆゑ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

シテ中シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

上地シテ中 心とめすは浮世もあらじ

トアラワレフネワ<sup>ヅ、ク</sup> ビヤクザウトナリツ、。  
 クル<sup>クル</sup> ヒカリモ トモニシロタエノ<sup>ナカムクル</sup> ハクウンニ  
 下<sup>下</sup> ウチノリテ<sup>フル</sup> ニシノソラニユキ<sup>ユル</sup> タマウ<sup>入</sup>  
 ツ、ク<sup>ツ、ク</sup> アリカタクソ ヲホエタル<sup>入</sup> アリカタク  
 コソヲホエタル

応永卅一年九月廿日

世書

れ

覚ゆれ

右で見られるように、光悦本と現行本とは殆んど変りがない。

光悦は寛永十四年、家光時代に歿しており、家康なども交わっていたと言われるから、徳川の初め頃に光悦本は版行されている。

自筆本では、初めの次第の「友なれば」であるのが、光悦本・現行本共「友ならば」となっている外は全く同じく、次の詞は、自筆本がややくだくらしく、光悦本・現行本は簡潔になっている。この詞のところの始めにサシ事としてある。同じ自筆本の「盛久」では、最初にサシコエモリヒサとして、イカニツチャトノニ申ヘキコトノ候の詞から始まって居り、「柏崎」では次第の次にサシ事コレワエチコノクニ云々の詞になっており、「雲林院」も次第の次、サシ事コレワツノクニアシヤノサトニ云々となっている。「高野物狂」も同様である。「知章」と「弱法師」とは、次第の次にコトハとして詞になっている。サシコエとサシ事とはどういう別があるのか。一見した処では、サシ事は詞で、サシコエは節附の処のように思われるが、盛久のサシコエの処が詞であり、他の曲でサシ事としてあるところが節附の処であることも多く見受けられる。これについては別に考究することとする。

ともかく、自筆本と現行本とを並べて見ると、川瀬博士の指摘されている通り、詞に当たる処では現行本と違っている処が多く、節附の処では差異が少ないことは事実である。

さて道行の「都をばまだ夜深きに」から、「江口の里につきにけり」までは、光悦本・現行本共に「都をばまだ夜深きに旅立ちて」に返しがあるが、自筆本には返しが無いだけで詞章は全く同じい。

道行の「江口の里につきにけり」のあと、自筆本には「コレワエクチノサト、申候」云々の詞があつてヲカシ（今の狂言）の詞まで記されているが、光悦本・現行本共に狂言のセリフは記していない。尤もワキ方では道行のあと着セリフをいうのが普通のものである。

今、春陽堂発行、野々村戒三・安藤常次郎両氏著の狂言集成に載っているところを摘記すれば次の通りである。

ワキ

〜急ぎ候程に。江口の里に着きて候。此所に於いて江口の君の旧蹟を尋ねばやと思ひ候。在所の人のわたり候か。<sup>アヒ</sup>〜里人のお尋ねは誰にてわたり候ぞ。<sup>ワキシカ〜アヒ</sup>〜あれに見えたる一段高き所が。江口の長の御旧跡にて

候間。御出であらうずるにて候。<sup>ワキ</sup>〜さらば立越え一見申さうずるにて候。<sup>アヒ</sup>〜重ねて御用もあらば承り候べし。

ワキシカ〜アヒ

〜心得申して候。

狂言セリフのあと詞と節附とを通じて、自筆本・現行本とは、文句に多少違いがあるが、内容は同じい。「忘れて年を」から「声ばかりして失せにけり」の中入までは殆んど同じく、わずかに「西行法師ノヨミケルアト」は現行本「西行法師が詠ぜし跡を」とし、「イヤサレハコソ カリノヤトリヲ、シムトノ 御心ノウチモ ハツカシケレハ ヲシマヌヨシノ御カエシヲ」の中の「カリノヤトリヲ、シムトノ 御心ノウチモ ハツカシケレハ」を現行本では省いておる。なお右の「御カエシヲ」は現行本では「御返事を」としているが、自筆本では、「御返事ヲ」

の「返事」を消して「カエシ」と訂正してある。この外「げにや浮世の物語」「たゞずむ影はほのく」とは自筆本には返しがつけてあるが、現行本では返しはない。以上の外は全部同じである。

中入の後、自筆本にはヲカシの詞章があるが、光悦本・現行本共に記されていないことは前段と同じである。現在のアヒ語りは自筆本に比して数倍長く、余り紙面を費すことになるので省略する。

アヒ語りがすんでからのワキの詞は、右記の如く、現行本は大分短かくて、待謡「言ひもあへねば」となる。この待謡から「あはれ世に逢はばや」までには「ウチノハシヒメノ」の「ノ」が、光悦本・現行本が「も」となっている外違がない。

次のワキの「ヨモステニ フケユク月ノ ミツノヲモニ ウカメルフネノウチヲミレハ ユウチヨノアマタ ウタウウタイ」が「不思議やな月澄み渡る水の面に、遊女のアまた謡ふ謡」となり、この後最後まで殆んど同じく、エクチノユウチヨノ カワゼウウウノの「ユウチヨ」が「君」となり、「ヨシトくナニカト トイタマウトモ」の「トイタマウトモ」が「宣ふとも」、「メクルカコトク」は「廻るが如し」、「シウフウラケツ」は「秋風蘿月」であらうが、光悦本・現行本共に「松風蘿月」となっている。「アイシウノ心イトフカシ」の「フカシ」は「深き」となり「マウセツ」は「妄舌」であるのを「妄染」とした。因みに現行宝生流は「妄舌」、金剛・金春・喜多は「妄染」となっている。

舞の後、シテの「ヲモシロヤ」は光悦本・現行本共に無い。「ヒカリモトモニ」は光悦本・現行本は「光と共に」となっている。最後の「アリカタクソ ヲホエタル アリカタクコソヲホエタレ」は、光悦本・現行本共に「ありがたくぞ覚ゆるありがたくこそ覚ゆれ」と改められている。

以上三本について詞章の異同を検討したが、結局、世阿弥時代のものと同現行のものとは、アヒの狂言のセリフ



を除いては大きな違いのないこと。殊に光悦本と現行本とは九分通り同じいことが認められる。

世阿弥はすばらしい能作者であるが、光悦本には更に洗練の跡が見られる。

自筆本に記されているサシ事などについては一寸ふれておいたが、その他ニイ・ツ、ク・ナカム・ラク・サウカフシ・モツ・上序・キリヒヤウシ・ハヤフシなどの語については大いに研究の価値があると思うので判明出来る範圍で記しておいた。

川瀬一馬博士の世阿弥自筆伝書集（わんや書店発行）は大変立派な書で、その恩恵を蒙む事が多いのだが、自筆を現代仮名に直されている処に自分の見方と相違する処が可なりあるので、「江口」に関するものについて、私見を記しておく。尤もこれは複写本によったもので、肉筆本を見る事が出来ず、複写本では印影の不鮮明な処が多く、却って私見に誤があるかも知れない。頁数は世阿弥伝書集の頁数である。

(二二九頁二行) 「ミエカクレナルカワクマニ」の「カワクマ」は「カワグマ」(二三一頁八行) 「トメテアウセノ」の右方の「クル」は「フル」、「ハル」は「クル」のように思われる。同じ行の下方「ウキヨノユメラ、ミナラワシノ」の右方の「ヒロク」は「ヒロウ」に見える。(二三三頁七行同下方「ヒトフシヲ」の右方「ヨセル」とあるのは「ヨスル」と見られる。(二三四頁一行) 「アソフニタリ」とあるのは「アソフニ、タリ」で「、」が脱落している。(二三五頁三行) 「クワウヨウノ秋ノユウヘ」の「クワウヨウ」の左方に「紅葉」と漢字があててあるが、その少し前に、「コウクワ」、「コウキンシウ」の語があり、「クワウヨウ」のあとにも、「クワウトケツ」の語があって、「コウ」と区別されている。漢字の旧仮名遣では「コウ」は「紅」、「クワウ」は「黄」であるから、自筆本の仮名に当てるなら、紅花・紅錦繡・黄葉・黄纈であるべきである。各流の謡本を見ると、光悦本と宝生では「紅葉」としているが、観世・喜多・金剛・金春は何れも「黄葉」である。自筆本そのものことで

ないが附記しておく。

(二三六頁二行)に「六ケンノ六マウ」とあるのは「六チンノキヤウ」とあるべきで「ケ」はいかにも一寸「チ」には見えないようであるが、「チ」の上の「ノ」の処が左へよりすぎたものと思われる。二番目の「六」は仔細に見ると、「キ」の縦の線が上部の「一」の処ですり切れていることが可なりはっきり見受けられ、「六マウ」の「マ」は明らかに「ヤ」である。これは、光悦本を初め現行諸本の如く「六塵の境」である。

最終の「アリカタクコソヲホエタル」とあるのは「アリカタクコソヲホエタレ」である。これも、最後の「タ」の下の「ノ」の処がすりきれて「レ」と結合して「ル」のように見えているものと断じてよいと考える。

一〇頁上段「月モカケサス」の処は、原文では前の行「サルフネノ」の次一字あけて続いているのであるが、右方の小字が多くて納めきれぬため、印刷所の方で改行されてしまい、校正したく思ったが、後の部分が面倒になるのでそのままにしたことをお断りしておく。なお自筆本・光悦本・現行観世本とも各行の字数は原本の通りでなく、行頭行末の句点。のつけ方は形式だけ原本に準じてつけてあることを申し添えておく。